

政治的アイテムとしての近世陶磁器の生産と流通

—薩摩藩を中心に—

渡辺 芳郎

はじめに

近世陶磁器の多くは商品として生産され流通した。つまり需要と供給、コストとベネフィット、流通ネットワークの形成と変容などといった経済的理由でその動向や変化を説明できることが多い。しかしその一方、近世における陶磁器は献上（進上）と下賜（拝領）、贈答など、身分制社会と密接に関係した政治的目的のために生産され、流通することもある。将軍家への献上品として有名な鍋島藩の鍋島焼がその代表的な例であろう（大橋 2007、佐賀県立九州陶磁文化館編 2006・2012）。このような商品ではなく、政治的な目的のために生産され流通した陶磁器を、ここでは「政治的アイテムとしての陶磁器」と呼ぶ。

筆者はこれまで近世における薩摩焼生産や南西諸島域における流通を検討する際に、その政治的な目的について個別的に触れてきた（渡辺 2015・2018 など）。本稿ではそれらの検討を踏まえ、また他の研究成果を参照しつつ、政治的なアイテムとしての陶磁器の生産と流通パターンの抽出を試みたい。

I 政治的アイテムとしての陶磁器生産—近世薩摩焼を事例として—

近世薩摩焼における政治的アイテムとしての陶磁器として、薩摩藩の藩窯である堅野窯系製品がある。本稿では、宇都窯・御里窯で生産された茶入と、その後、鹿児島城下の堅野窯で焼かれた製品を取りあげる。

1. 茶入

現在の始良市に所在する宇都窯跡・御里窯跡は、朝鮮陶工の金海（和名：星山仲次）が、島津義弘の庇護・管理の下に製陶に従事した窯跡である。宇都窯跡は 1934 年（田澤・小山 1941）、御里窯跡は 1941 年（佐藤 1941）に発掘調査されたが、その後、前者は 2000 年（深野 2004）、後者は 1995 年、2000 年（加治木町教育委員会編 2003）に再調査され、新しい成果が数多く得られた。その中で御里窯跡において確認された I 類と II 類の茶入は、茶陶としての初期薩摩焼の性格を考える上で重要な手がかりとなる。

II 類茶入が通常のロクロ成形であるのに対し、I 類茶入は付け底という、円板状の底部に胴部を貼り付けて作る特異な技法が用いられている（図 1）。出土した茶入 155 点のうち 62 点が I 類なので、失敗の補修ではなく、安定した技法の一つだったと言える。この付け底技法は、円板状の粘土の上に粘土紐を積み上げてタタキを施す甕や壺などの成形技法と共通する。朝鮮王朝時代の陶工は、碗や皿をロクロ成形で製作する沙器匠（さきしょう）と、甕や壺をタタキ技法で製作する甕匠（おんじょう）に厳密に区分され、鹿児島に連れてこられた陶工は甕匠であったと推測されている（片山 1998・2018）。御里窯跡出土の甕の口縁部形態や内面当て具痕など、苗代川堂平窯跡出土の甕（鹿児島県立埋蔵文化財センター編 2006）との共通性が認められ、甕匠が御里窯で製陶に従事していたことがわかる。つまり I 類茶入は、甕匠である朝鮮陶工が、みずから持っている甕や壺の製作技術を応用することで作った茶入と考えられる。ただし I 類茶入は糸

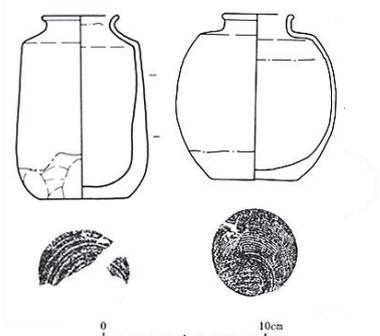


図 1 御里窯跡出土の茶入
（左：I 類、右：II 類）
（加治木町教育委員会編 2003）

切り底を作り、また胴部上半部にはロクロ目が見られることから、Ⅱ類茶入と同様、ロクロ成形技法も取り入れている。金海は「上方」で茶入製作の稽古をしたと伝えられ、その結果がⅡ類茶入だけでなくⅠ類茶入にも活かされていると考えられる（加治木町教育委員会編 2004、関 2004）。

なお付け底茶入は御里窯跡に先行する宇都窯跡と、後続する堅野冷水窯跡でも出土しており、同技法の茶入が継続して生産されていること、つまり御里窯におけるⅠ類とⅡ類は先後関係にはなく並行して製作されていたことがわかる（加治木町教育委員会編 2004）。

ではなぜロクロ成形技法が導入されⅡ類茶入が製作されたにもかかわらず、甕匠系技術を応用したⅠ類茶入が生産され続けたのであろうか。宇都窯や御里窯で生産された茶入が、徳川幕府の要人などに盛んに贈呈されていたことが、『旧記雑録』に収められた書状などからわかる（表 1）。これらは茶入として特異な技法・形態を有するⅠ類茶入と推測される。またその中には、「天下一の茶匠」として徳川秀忠の指南役でもあった古田織部（重然）（1543-1615年）の関与が確認できる。関ヶ原の戦いで西軍に属し、徳川家・幕府との関係の安定化が喫緊の課題であった島津家にとって、古田織部の支持を得た薩摩茶入は両者をつなぐ重要な贈答品として扱われていたと考えられる。古田織部が、慶長 20（1615）年、大坂夏の陣で豊臣方との内通を疑われ自刃したのち、茶入の贈答記事が姿を消すことから、その政治的な性格が推測される（関 2004、上原 2005、松村 2006）。これまで宇都窯や御里窯は、隠居した島津義弘の茶人としての趣味の窯と考えられてきたが（田澤・小山 1941 p. 36 など）、むしろ近世初期の島津家を取り巻く政治的状況と深く結びついたものであった可能性が高い。

2. 白薩摩

白薩摩とは白色胎土に透明釉をかけた製品で、すでに宇都窯において白色胎土製品の生産が確認されているが（深野 2004）、堅野冷水窯跡（鹿児島市）では大量に出土しており、堅野窯の主要製品のひとつであった。同窯跡は 1976 年に発掘調査されたが（戸崎他編 1978）、その後、出土資料の再整理が実施され、新たな知見が得られている（調査課第一調査係（東和幸・関明恵）2014）。その一つとして精良な白色胎土を用い、精緻な型作りの白薩摩の小皿類の確認がある（図 2）。それらの一部は素焼き段階で意図的な穿孔が見られ、厳密な品質管理がなされていたことがうかがわれる。これらは今のところ、鹿児島城跡では確認されておらず、薩摩藩江戸藩邸でのみ見出されており、主たる供給先が江戸藩邸であったと考えられる（関 2017）。

さらに『旧記雑録』によれば、慶安 3（1650）年から貞享 3（1686）年にかけて、「国焼之皿廿」「国焼之皿五十」「領国新製御皿五箱」「新製之皿二箱」「薩州新製之

表 1 書状などに見られる薩摩茶入

年月日	西暦	差出人	宛先	茶入	窯
慶長9年12月1日	1604	山口直友	島津義弘	茶入	宇都窯
慶長10年1月10日	1605	島津義弘	榊山権左衛門	かたつき	
慶長10年2月13日	1605	山口直友	島津義弘	かたつき二ツ	
慶長10年4月3日	1605	島津義弘	東郷藤兵衛	肩衝二ツ	
慶長10年4月23日	1605	伊藤則口	島津家久	かたつき	
慶長10年9月15日	1605	本多正純	島津義弘	六ツ以上	
慶長11年5月1日	1606	島津義弘	島津家久	肩衝六ツ	
慶長11年5月27日	1606	福岡正則	島津家久	茶入五ツ	
慶長17年5月10日	1612	島津義弘	本多正純	かたつき三ツ	
慶長17年5月10日	1612	島津義弘	山口直友	かたつき	
慶長17年5月10日	1612	島津義弘	立花左近	当国焼のかたつき	御里窯
慶長17年7月25日	1612	島津義弘	宗善	肩衝四ツ	
慶長17年7月25日	1612	島津義弘	正因	肩衝一ツ	
慶長17年10月3日	1612	島津義弘	山口直友	かたつき三ツ	
慶長17年10月3日	1612	島津義弘	宗善	かたつき七ツ	
慶長17年11月22日	1612	古田重然	島津義弘	肩衝二ツ	
慶長18年4月4日	1613	島津義弘	徳乗	肩衝二ツ	
慶長18年9月24日	1613	山口直友	島津義弘	かたつき二ツ	
慶長19年6月1日	1614	島津義弘	日記技粋	肩衝一ツ	

（松村2006より一改変）

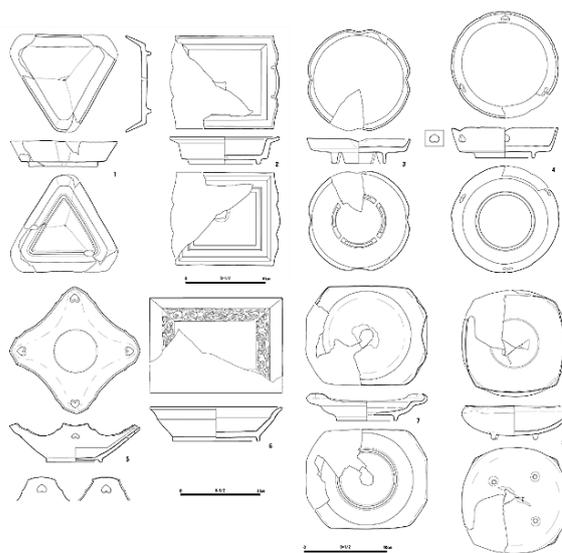


図 2 堅野冷水窯跡出土の白薩摩型作り製品
（調査課第一調査係（東和幸・関明恵）2014）

皿五箱」などが将軍家へ献上されている（表2）。「新製」とあることから、それまでとは異なるタイプの製品であり、また「廿」「五十」などの表記から組物と思われる。つまり確認された白薩摩の小皿類が、その作りの精緻さと組物に適した型作りであることから、この献上品に該当する可能性が考えられる（深港2014、関2017）。やや想像をたくましくすれば、近世初期の茶入に替わる「新製」の献上品として白薩摩がみなされていた可能性もある。

表2 将軍家への献上薩摩焼

和暦	西暦	献上品の内容
慶安3	1650	国焼之皿廿
万治3	1660	国許焼之皿五十
寛文11	1671	於領国新製御皿五箱
延宝4	1676	新製の御皿二箱
延宝4	1676	薩州新製之皿五箱
貞享3	1686	御皿五箱

（深港2014より一部改変）

3. 色絵薩摩

白薩摩に上絵付けした製品を色絵薩摩と呼ぶ。文献中では「錦手」などと表現される。現在確認されている、もっとも古い色絵薩摩生産に関する記述は、薩摩藩の「記録所」の明和元（1764）年の記録に出てくるもので、遅くとも正徳3（1713）年に「焼物方錦手絵書并小細工」という役職があったことが知られる（深港2017 pp.7-9）。この「焼物方」は堅野窯を指すと考えられるが、具体的にどのような「錦手」が生産されたのかは、まだ判然としない。ただしその使用方法にいくつか記録がある。

撰家の一つ近衛家の家熙（1667-1736年）の茶会記には、「薩摩焼」「薩摩古手」の茶碗や「古薩摩瓢箪」の茶入の使用が認められるが（名和他監修2020 p.49・65・230など）、享保20（1735）年11月19日に「薩摩焼白絵」の香合の記載が見られる（同上pp.372）。「白絵」が何を指すのか確定しがたいが、他に「白薩摩」の花入（同上p.47）という表記があることから、それとは別のものとする色絵薩摩の可能性が考えられる。後述するように島津家は近衛家に琉球経由で入手した清朝官窯磁器を進上しているのと同様にこの「薩摩焼白絵」が進上品だったとするならば、この年代に進上用の上質な色絵薩摩が生

表3 「中奥日記」に見られる薩摩焼の贈答

和暦	西暦	品名	差出	宛先	目的
宝暦6	1756	にしきて御国やき色一	太守様	姫様（菊姫）	中奥訪問の御礼
		御国やき茶碗二つづつ	此御方	おいつ・梅岡・千秋	表訪問の際の贈り物
宝暦12	1762	茶家二 但、御国焼	春井	高輪屋敷	高輪屋敷の所望
		御国焼茶家一つ、御国焼御茶わん一つ	澤野	眞含院様（菊姫）	暇乞い参上の際
		御国やき 御瀬戸物 茶家一、茶わん二	瀬川	眞含院様（菊姫）	御歳暮・御結婚の祝儀
明和元	1764	御国焼丁子風呂一	御内一	御守殿（竹姫）	参府の国元土産
		薩州製御丁子風呂 一台	太守様	民部卿	参府の国元土産
		御国焼丁子風呂 一箱	島津左中	御前様	中奥訪問の折の諸贈答
明和2	1765	御国焼御茶わん二つ	瀬川	眞含院様（菊姫）	歳暮の御祝儀
		錦手御茶わん 二箱	太守様	御前様	参府の国元土産
		御国焼茶わん 二つづつ	於薫殿	御年寄衆三人	御歳暮
明和3	1766	御国焼茶家 二	瀬川	眞含院様（菊姫）	御歳暮の進上物
		御国焼 御茶家、御茶碗 一台	太守様	松平越前殿	松平の奥訪問の際
		白焼濃茶一碗 二つづつ	太守様	御守殿小上臈於幾・於豊	参府の国元土産
		白焼薄茶一碗五つづつ	太守様	御守殿大年寄岡田殿	参府の国元土産
		錦手焼御香道具一通	太守様	眞含院様（菊姫）	参府の国元土産
		錦手焼御水入一	太守様	屋世様	参府の国元土産
		錦手御香道具一通、錦手丁子風呂 一箱	太守様	浄岸院様（竹姫）	参府の国元土産
		錦手一輪花入一、錦手御香道具一通	太守様	御前様	参府の国元土産
		白焼花入一	太守様	淡路守殿御奥方	参府の国元土産
		御国焼茶家一、琉球盆一、錦手茶碗一	太守様表（屋敷の表）	その橋	内々の贈り物
明和4	1767	御国白焼濃茶茶碗 一箱、同焼物御香道具 一箱	伊織	御守殿（竹姫）	出立のため進上
明和5	1768	御国焼茶家 拾	御内證（榊山左京）	御守殿（竹姫）	出立のため進上
		白焼濃茶碗 二宛	太守様	御守殿御年寄衆四人	参府の国元土産
		白焼丁子風呂 一箱	太守様	眞含院様（菊姫）	参府の国元土産
		白焼煎茶碗 拾 白木箱入	太守様	島津談路守殿御奥方	参府の国元土産
		白焼人形香炉 一箱	太守様	民部卿	参府の国元土産
		（白焼）人形 箱入 一鉢	太守様	一橋御康中	参府の国元土産
		白焼丁子風呂 一ツ箱入	太守様	善修院様	参府の国元土産
		御国茶家 五	御内證（仁禮仲右衛門）	御守殿（竹姫）	参府到着の際、進上
		御国焼茶家 三	御内證（二階堂蒞）	御守殿（竹姫）	参府到着の際、進上
		御国焼茶家 茶碗 一台	大和殿	御前様	出立のため進上

（深港2014より一部改変）
*太字は色絵製品と丁子風呂

産されていた可能性を示す。

また島津重豪が藩主だった時期（1755-87年）の薩摩藩江戸藩邸「中奥日記」には、陶磁器の贈答記事が見られる（深港 2014 p.166）（表 3）。その中から「にしきて」「錦手」に注目すると、遅くとも宝暦 6（1756）年において、「太守様」（藩主・重豪）の贈答品として使用できるほどの品質の製品が生産可能であったことがわかる。「にしきて」「錦手」の器種としては、「茶わん」「香道具」「水入」「丁子風炉」「一輪花入」などが確認できる。その多くが、重豪の江戸参府の際の国元土産として贈答していることは、これらが薩摩産であり、藩窯製品であったことを示す。また 18 世紀段階の色絵薩摩生産はごく少数で、使用者も藩主などに限定されていた可能性が指摘されている（深港 2014 pp.165-167）。

ところで藩窯の製品は、一部に商品（「商売焼」）もあったが（橋口 2001・2002、深港 2014）、その多くは藩からの需要に応えるための「御用」の製品である。幕末の『御内用方萬留 一番』には、「御用」として、将軍家などへの献上品である「献上御用」、藩主が使用する什器など「御前御用」、藩主の娘などの輿入れ道具と考えられる「お先御用」、藩における公用品である「御用」など複数種類の用例がある（深港・渡辺 2016、渡辺 2018）。上記の近衛家熙が茶会に用いた「薩摩白絵」の香合は「献上御用」、重豪の贈答品としての色絵製品は「御前御用」に相当すると言え、ともに御用品の中でも高ランクに属するものと考えられる。

4. 宋胡録写

宋胡録写とは、鉄絵で器表面のほぼ全面が方形に区画され、その区画内にさまざまな文様を描き込んでいく点に特徴がある。「写」とあるように、香合などとして茶道具に導入されたタイの鉄絵陶器「宋胡録」を模倣したもので、近世の文献中にも「すんころく」「宋胡録手」などという表記が見られる。しかしその器種や描かれた文様は、本歌の宋胡録と大きな違いがある（渡辺 2015）（図 3）。

宋胡録写の使用方法として、享保 12（1727）年に田ノ浦にある市来寿伯亭に川上久盤が第 4 代藩主・島津吉貴（1675-1747 年）を招いての献茶会において「すんころく平（皿か）」が使われたとある（横田・山田 1985 p.278）。また将軍家への例年献上品である「砂糖漬天門冬」と「赤貝塩辛」（表 4）を入れる容器（「蓋物」「器」）に、安永 6（1777）年より「薩州製宋胡録手焼」を用いて献上したいと幕府に申し出たところ、許可されたという記録である（深港 2014、渡辺 2015）。

藩主進上の茶会で使用された宋胡録写は、先述した「御前御用」に該当する。また将軍家への献上品の容器としての使用もまた、その品質の高さを示唆している。大橋康二は、近世における将軍家と各大名家との主従関係の確認行為として、参勤交代とともに例年献上の重要性を指摘している。例年献上とは「月次献上」「年中献上」とも呼ばれ、諸大名が石高に応じて、月ごとで国元の産物などを将軍家へ献上する制度で、身分や家格により細かく規定されていた（大橋 2012 p.177）。

なぜこのような「御前御用」や将軍家献上品の容器



図 3 宋胡録写（鹿児島城本丸跡出土）

（鹿児島県教育委員会編 1983）

表 4 薩摩藩の例年献上品（文政元（1818）年）

時期	献上品
正月元日	御鏡菱餅
正月三日	御盃台
同月七日	生鯛
二月	鯛（するめ） 昆布御樽
帰国御礼	琉球芭蕉布三種二荷
四月	丸熨斗香 寿帯香 竜涎香 長寿大官香
暑中	琉球布 砂糖漬天門冬 赤貝塩辛 泡盛酒
七月	御鱈代黄金
七月十五日	蓮御飯 刺鱈
八月	国許干肴
九月	干鱈（なます） 残魚
十一月	琉球熬海鼠
寒中	琉球油 七島鱈節
十二月	桜島蜜柑 焼鮎

（渡辺 2015 より）

として宋胡録写が使用されたのか。薩摩藩は、慶長 14 (1609) 年の琉球侵攻以後、日本で唯一、琉球という「異国」を支配するという特異性を有している。薩摩藩は「異国領有」という特異性を、対外的な「イメージ戦略」としても利用していたと推測される(渡辺 2005、渡辺^美 2018)。また島津家が 16~17 世紀初頭、東南アジアと盛んに貿易していたことが指摘されており(新田 1997a・b、徳永 2011 pp. 43-48)、中世鹿児島に東南アジア陶磁器が数多く流通している様相が、考古学的にも明らかにされてきている(重久 2004、橋口 2011、岩元 2014)。

薩摩藩にとって「異国との結びつき」は、みずからの独自性・優位性を対外的にアピールする重要なアイテムであったと言えよう。將軍家献上品容器として、東南アジアとの関係性、あるいは少なくとも「異国性」を暗示させる宋胡録写の蓋物を選択していることは、同様の「対外イメージ戦略」の一環としてとらえることも可能であろう(渡辺 2015)。

II 政治的アイテムとしての陶磁器流通—近世南西諸島域を事例として—

近世の南西諸島域において流通した政治的アイテムとしての陶磁器には清朝官窯製品、鍋島藩窯製品、堅野窯製品がある。

1. 清朝官窯製品

中国の明・清王朝は、皇帝が使用する陶磁器や下賜品などを生産する官窯を現在の江西省景德鎮に設置した。そのうち清朝の官窯製品が首里城跡を中心に出土している。森達也(2018)によれば、これまで 56 件の出土が確認されており、うち紀年銘は康熙年製(1662-1722 年) 9 件、雍正年製(1723-35 年) 11 件、乾隆年製(1735-95 年) 1 件、嘉慶年製(1796-1820 年) 2 件があり、道光年製(1821-50 年) も未報告資料にあるという。これらはその特徴から皇帝専用とは異なるタイプで、下賜用に作られた製品と考えられ、首里城跡に土地が偏ることから、琉球国王が身边に置いて珍重したと指摘している。また真珠道跡出土の「大清康熙年製」銘の碗(図 4)には桃の文様が見られることから、雍正 4 (1726) 年に回賜された「五彩蟠桃宮碗十四件」のうちの一つと推測されている(謝 2014)。

琉球王府に入った清朝官窯製品が薩摩藩を通じて日本国内にも流通していた可能性がある。琉球館文書の文化 4 (1807) 年 5 月 26 日付文書(那覇市編 1970、No. 187)には以下のようにある。

近年官窯の内一向ニ窯氣無之、偽物と相見へ候品専有之候。右者直(値)段も下直ニ有之候処より買渡候筋ニても可有之哉。又は琉球ニて取捨候儀ニテハ有之間敷哉、右品之儀は御献上ニも相成事候処、万一偽物取交り候儀共有之候ては決して相成事候間、窯氣無之訳、且出所等の儀、委相糺可申上旨被仰渡(下略)

琉球王府を通じて薩摩藩に入る官窯製品の品質が落ちているので偽物ではないかと疑っている内容であるが、このことは文書の年代である文化 4 年以前から、薩摩藩は王府を通じて清朝官窯製品を入手していたことを意味している。さらに「右品之儀は御献上ニも相成事候処」とあることから、それが献上品として用いられていたことを示している。

この琉球経由の清朝官窯製品の一つとして考えられているのが、近衛家に伝わる白磁金瑠璃脚付碗(現陽明文庫所蔵)である。同種のものは台湾国立故宫博物院にも所蔵されている(京都国立博物館編 2013、尾野 2013・2020、謝 2014)。この近衛家伝来品は、島津家から献上され、享保 13 (1728) 年 4 月 3 日、近衛家熙が菓

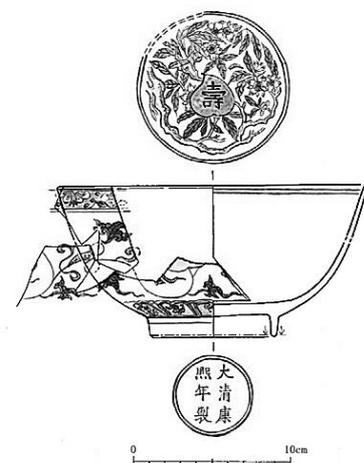


図 4 真珠道跡出土清朝官窯磁器
(沖縄県立埋蔵文化財センター編 2006)

子器として使用したことが、彼の言行を記した侍医・山科道安の『槐記』に見られる。この白磁金瑠瑯脚付碗は、雍正帝から雍正2（1724）年に琉球王府に回賜された「磁胎焼金瑠瑯有靶蓋碗六件」のうち一つが島津家に入り、さらに近衛家熙の息子・家久の関白就任の祝いとして島津家から近衛家に献上されたのではないかと推測されている（謝 2014、尾野 2020）（表 5）。

表 5 「金瑠瑯」関係年表

中国暦 和暦	西暦	項目
雍正元	1723	琉球国王が雍正帝の即位を祝して慶賀使を派遣。
雍正2	1724	雍正帝が「金瑠瑯」を含む26品目を琉球国王に回賜。
雍正3	1725	帰国した慶賀使により回賜品が琉球王にもたらされる。この年のうちに金瑠瑯が薩摩藩に送られたのではないか。
享保11	1726	近衛家久の関白就任（その祝いとして薩摩藩が近衛家に「金瑠瑯」を献上したのではないか）
享保13	1728	近衛家熙が家久から譲り受けた「金瑠瑯」を菓子器として茶会で使用。

※尾野2020を元に作成

このように清朝官窯製品は、琉球王府、島津家、近衛家など、当時の社会階層トップクラスの間で流通していたことがわかる。上掲の琉球館文書からすれば、清朝官窯製品の入手は決して1回限りではなく、おそらく徳川將軍家なども含みながら、継続的に流通していたことが想像される。

2. 鍋島藩窯製品

鍋島藩窯で焼かれた鍋島焼は、主として將軍家への献上を目的として生産された磁器であるが、そのほかにも京都の公家や他大名への贈答品としても用いられた（大橋 2007 など）。そのような目的を持つ鍋島焼が首里城跡から出土している（図 5）。年代的には 1680-90 年代、盛期鍋島と呼ばれる時期のもので、出土資料には被熱痕があることから、1709 年の火災で損壊、廃棄された可能性が指摘されている（沖縄県立埋蔵文化財センター編 2001）。

この鍋島焼がどのような経路で琉球王府に入ったのか。琉球王府との関係は島津家により厳しく制限されていたので、鍋島家から直接琉球王府に入ったとは考えにくく、鍋島家→島津家→王府、あるいは鍋島焼の將軍家献上品としての性格から、將軍家が途中に介在した可能性（鍋島家→將軍家（→島津家）→王府）も想定できる。いずれにしても、先の清朝官窯製品と同様、当時の社会階層トップクラス間での贈答関係の一端を示していると言えよう。



図 5 首里城跡出土鍋島焼
（沖縄県立埋蔵文化財センター編 2001）

3. 豎野窯製品

豎野窯製品は奄美群島の旧家伝来品にしばしば見られる。たとえば奄美大島大和村盛岡家（旧姓盛家）伝来資料には、褐釉を掛けた丁字風炉があり、「嘉永七年寅七月吉日／丁子風呂（マ）入／與人／前武仁」の箱書きを持つ木箱に入っている。また白薩摩の碗 1 点が伝わっている（渡辺編 2021）。瀬戸内町加計呂麻島の西家には白薩摩の丁字風炉 3 点、白土に茶色い土を象嵌した丁字風炉 1 点が伝来している（図 6）。後者と同じ象嵌の三足盤の破片が西家の屋敷跡で採集されている（渡辺編 2015、渡辺 2018）。これら盛岡家や西家は近世奄美における地域有力者で、藩から与人（最高位の島役人）などの役職を与えられた。また沖縄の久米島には最高位のノロの家に豎野窯産の象嵌双耳瓶が伝来しており、これらは薩摩藩から琉球王府を介して同家が拝領したと考えられる（渡辺 2018）¹。



図 6 奄美西家伝来丁字風炉
（瀬戸内町郷土館保管・渡辺編 2015）

豎野窯の丁字風炉は、島津重豪が江戸藩邸の竹姫などに「御国焼丁

子風炉」(1764年)、「錦手丁子風炉」(1766年)、「白焼丁子風炉」(1768年)を頻繁に「国元土産」として贈っている(表3)(深港2014・2017)。また色絵製品や象嵌製品、宋胡録写など、1点1点の器形や文様にバリエーションが豊富であることから一品生産と考えられる(深港2017、渡辺芳2018)。さらに遺跡からの出土例がきわめて少ないこと²などを踏まえると、一般的な商品として流通していたとは考えにくく、堅野窯にとっても特殊な製品と考えられる。それゆえ奄美群島の伝来陶磁器における丁子風炉も、一般商品の流通の回路とは別の藩との関係、拝領品として入手したと想定することが可能である。つまり藩による島支配の一環として、これら堅野窯製品が地域有力者に与えられた可能性を考えておきたい(渡辺編2021)。

おわりに

以上、近世における薩摩焼と南西諸島域の陶磁器流通から、政治的アイテムとしての陶磁器の生産と流通を見てきた。本稿で確認できた政治的アイテムとしての陶磁器の生産と流通には、以下のような空間的、社会階層的に異なるレベルがあったと言える。

- ①国際レベル：清朝官窯磁器(清朝皇帝－琉球国王－島津家－近衛家(－将軍家?))
- ②国際／国内レベル：鍋島焼(琉球国王－島津家－鍋島家(－将軍家?))³
- ③国内レベル：堅野窯製品(茶入・白薩摩・色絵・宋胡録写)(島津家－将軍家－近衛家)
- ④藩内レベル：堅野窯製品(丁子風炉など)(島津家－奄美群島の地域有力者など)

①～④のような政治的アイテムの流通は、必ずしも陶磁器に限定されるものではない。近世日本における対外交渉は「四つの口」(松前・対馬・長崎・琉球)が設定され、それぞれの「口」でさまざまな物資が流通していた(荒野1988、渡辺編2021)。その中でオランダ商館長の江戸参府や朝鮮通信使などにおいてさまざまな政治的・儀礼的贈答が行われている。また②としては、慶賀使や謝恩使などの琉球使節を通じて、琉球の物産が徳川将軍に献上された。③については本文中でも触れたように、将軍家と全国各地の大名との間で「例年献上」という形で制度化されていた。④のような拝領品は、それぞれの藩内部において藩主権力／権威の維持の重要な装置として機能していたと考えられる。本稿で取り上げた陶磁器もそのようなさまざまなレベルでの政治的アイテムの流通の一端を担うものとして評価できる。また①②の流通は「琉球口」を担った薩摩藩の独自性の現れの一つと考えられる。

註

- 1 同種の象嵌双耳瓶がトカラの悪石島に伝来していたことが白木原和美(1985)によって報告されているが、現段階で筆者は未見である。
- 2 遺跡からの堅野窯産丁子風炉の出土事例は、管見の限りでは今のところ鹿児島市若宮遺跡D地点のみである(鹿児島市教育委員会編2014 p.46)。ただし鹿児島城本丸跡から、残存部分が少ないため確定できないが、象嵌製品の丁子風炉とも考えられる資料(報告では「風炉」)が出土している(鹿児島県教育委員会編1983 pp.116-117)。
- 3 近世琉球は日本の幕藩体制に組み込まれつつも、中国王朝(明・清)と冊封関係を結んだ「異国」とみなされていた。それゆえ国内かどうかは、単純にはとらえきれない。それゆえ「国際／国内レベル」とした。

参考引用文献

- 荒野泰典 1988『近世日本と東アジア』東京大学出版会
- 岩元康成 2014「中世後半から近世初頭の南九州における東南アジア陶磁器と華南三彩」『Archaeology from the South II－新田栄治先生退職記念論文集－』pp.311-323 新田栄治先生退職記念事業会 .
- 上原兼善 2005「大名茶の形成と島津氏」『日本史研究』518 pp.1-24
- 大橋康二 2007『将軍と鍋島・柿右衛門』雄山閣

- 大橋康二 2012 「将軍家献上の鍋島・平戸・唐津」佐賀県立九州陶磁文化館編 2012 pp. 177-203
- 沖縄県立埋蔵文化財センター編 2001 『首里城跡—管理用道路地区発掘調査報告書—』同センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター編 2006 『真珠道跡』同センター
- 尾野善裕 2013 「清朝官窯と近世日本」『陶説』728 pp. 19-26
- 尾野善裕 2020 「「金瑛瑯」は、なぜ「和蘭陀ノ焼物」なのか—伝世有形文化財（考古資料）と文字史料—」『奈文研論叢』1 pp. 45-55
- 鹿児島県教育委員会編 1983 『鹿児島（鶴丸）城本丸跡』同委員会
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター編 2006 『堂平窯跡』同センター
- 鹿児島市教育委員会編 2014 『若宮遺跡D地点』同委員会
- 加治木町教育委員会編 2003 『御里窯跡』同委員会（現始良市）
- 片山まび 1998 「朝鮮人陶工」とは誰なのか？—全羅道・慶尚道の十六世紀窯址と岸嶽系唐津の比較から—『陶説』541 pp. 34-40
- 片山まび 2018 「朝鮮時代の「甕器」について—薩摩堂平窯跡との比較を視座として—」『那覇市立壺屋焼物博物館紀要』19 pp. 23-32
- 京都国立博物館編 2013 『魅惑の清朝陶磁』同館
- 佐賀県立九州陶磁文化館編 2006 『将軍家への献上 鍋島—日本磁器の最高峰—』同館
- 佐賀県立九州陶磁文化館編 2012 『将軍家献上の鍋島・平戸・唐津—精巧なるやきもの—』同館
- 重久淳一 2004 「鹿児島県内から出土したタイ、ベトナム陶磁」『シンポジウム陶磁器が語る交流—九州・沖縄から出土した東南アジア産陶磁器—』pp. 47-66 東南アジア考古学会他
- 謝明良 2014 「關於金瑛瑯靶碗」『故宮文物月刊』372 pp. 2-12
- 白木原和美 1985 「悪石島の外国陶磁」『熊本大学文学部論叢』17 pp. 165-187
- 田澤金吾・小山富士夫 1941 『薩摩焼の研究』東洋陶磁研究所（国書刊行会復刻 1987 年）
- 佐藤進三 1941 「古薩摩お里窯発掘に就て」『陶磁』14-1 pp. 1-32
- 関明恵 2017 「堅野（冷水）窯跡出土の白薩摩型打ち製品」『中近世陶磁器の考古学』7 巻 pp. 153-173 雄山閣
- 関一之 2004 「薩摩の茶入—御里窯跡出品から—」『野村美術館研究紀要』13 pp. 172-186
- 調査課第一調査係（東和幸・関明恵）2014 「収蔵遺物保存活用化事業—堅野（冷水）窯跡の再整理を中心に—」『鹿児島県立埋蔵文化財センター研究紀要・年報 縄文の森から』7 pp. 65-82
- 徳永和喜 2011 『海洋国家薩摩』南方新社.
- 戸崎勝洋他編 1978 『堅野（冷水）窯址』社団法人鹿児島共済南風病院
- 那覇市編 1970 『那覇市史資料篇 第一巻二 薩琉関係文書』那覇市
- 名和修他監修・川崎佐知子校訂 2020 『御茶湯之記—予楽院近衛家熙の茶会記—』茶湯古典叢書 6 思文閣
- 新田栄治 1997a 「知覧城出土のタイ産陶片と薩摩の海外貿易」『知覧文化』34 pp. 161-175
- 新田栄治 1997b 「知覧・豊玉姫神社所蔵のクリスと薩摩の東南アジア貿易」『ミュージアム知覧紀要』3 pp. 1-14
- 橋口亘 2001 「南西諸島にもたらされた近世薩摩焼—近世薩摩焼の南と北—」『からから』10 pp. 9-16 鹿児島陶磁器研究会
- 橋口亘 2002 「文化三年銘白薩摩染付松竹牡丹文角形酒注をめぐる諸問題—薩摩焼と錫器のデザイン、白薩摩角形酒注の価格・堅野系製品の流通について—」『からから』13 pp. 11-22 鹿児島陶磁器研究会
- 橋口亘 2011 「南九州出土の東南アジア産陶磁についての一考察」『陶磁器流通と西海地域』pp. 13-21 関西大学文化交渉学教育研究拠点
- 深野信之 2004 「古帖佐焼宇都窯跡」『始良町内遺跡詳細分布調査報告書』pp. 34-53 始良町教育委員会（現始良市）
- 深港恭子 2014 「窯業生産地としての苗代川の形成と展開」『薩摩・朝鮮陶工村の四百年』pp. 159-189 岩波書店
- 深港恭子 2017 「薩摩焼における錦手技法の成立と展開：万国博覧会における薩摩錦手好評の背景」『黎明館調査研究

報告』29 pp.1-19

深港恭子・渡辺芳郎 2016 「幕末苗代川における磁器生産－『御内用方萬留 一番』の検討から－」『東洋陶磁』45 pp.155-180

松村真希子 2006 「『島津家文書』にみる薩摩焼」『東洋陶磁』35 pp.97-112

森達也 2018 「首里出土の清朝景德鎮官窯磁器」『沖縄考古学会 2018（平成30）年度研究発表会資料集 古都首里を掘る』pp.97-104 沖縄考古学会

横田八重美・山田哲也 1985 「近世大名の茶会記」『茶道聚錦5 茶の湯の展開』pp.275-283 小学館

渡辺美季 2018 「『薩藩勝景百図』による南九州生活絵引」『日本近世生活絵引 南九州編』pp.149-156 神奈川大学 日本常民文化研究所非文字資料研究センター

渡辺芳郎 2005 「なぜ薩摩藩は苗代川に朝鮮習俗を残したのか？」『鹿大史学』52 pp.9-18.

渡辺芳郎 2015 「薩摩焼・宋胡録写の性格をめぐる一試考」『金沢大学考古学紀要』36 pp.71-83

渡辺芳郎 2018 「近世薩摩焼・象嵌陶器の基礎的研究」『中近世陶磁器の考古学』9巻 pp.275-304 雄山閣

渡辺芳郎編 2015 『近世日本国家領域境界域における物資流通の比較考古学的研究』平成24～26年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）研究成果報告書 鹿児島大学法文学部

渡辺芳郎編 2021 『近世国家境界域「四つの口」における物資流通の比較考古学的研究』2016～2020年度科学研究費補助金（基盤研究(B)）研究成果報告書 鹿児島大学法文学部